二〇一九年八月二七日（参加者一〇名）

灯火親し子規の句集を繙けり　わかば
里山の棚田一斉落し水　わかば
何処までも続く木道草紅葉　わかば
厨事済ませて灯火親しみぬ　わかば
馬の背を行く人影や秋の雲　わかば
磊々を洗ふ水音や風は秋　わかば
見送りは此処まででよし彼岸花　うつぎ
産土の笛の音聞こゆ落し水　うつぎ
風を切るペダルに力湖の秋　うつぎ
灯火親し書架より抜きし唐詩選　うつぎ
秋燕標高千の方位盤　うつぎ
電線に音符並びす秋燕　こすもす
生まれ月そして一番好きな秋　こすもす
愛用のスマホで灯火親しみぬ　こすもす
捨て舟に絡む河原の草紅葉　こすもす
どこまでも青海原や島の秋　もとこ
髪解けば潮の香にほふ残暑かな　もとこ
登校の声賑やかし秋の雲　もとこ
爽やかやシルバーヘアー靡かせて　もとこ
六道の鐘が鳴る径草紅葉　ぽんこ
爽やかや山湖の風に身を委ね　ぽんこ
逆立てる仁王の髪や秋暑し　ぽんこ
鉄塔の高きをよぎる秋の雲　せいじ
せせらぎも葉擦れの音も秋の声　せいじ
老い二人灯火親しむ聖書かな　せいじ
石舞台古墳際立て彼岸花　小袖
龍淵に潜む水面に蒼き風　素秀

席題句会みのる選

二〇一九年八月二七日（参加者一〇名）